佳作

自然災害の恐ろしさ

山形県戸沢村立戸沢中学校
二年　安食愛梨

忘れもしない八月五日の夜。それは私の生まれて初めての体験でした。

その日は、昼から雨が降り、時々雨の音が強く「ダダダダダ」と今にも地面に穴が開くのではないかと思わせるほどの強い雨音でした。私は初めは、あまり心配せず、時間が過ぎれば雨が止むだろうと思い家族と茶の間でテレビを見ていました。

しかし、夕方になっても雨は止むどころかしだいに強くなり、そしてすさまじい雷。ふきつける「ビュービュー」という風の音。

その音を耳にした時の不安な気持ちは、今でも覚えています。

夜になり、激しい大粒の雨が「バチバチ」と音を立て鳴り響いていました。

眠れない。眠れない。

いつもなら雨の音など気にもせずに眠っていましたが、その日に限り、どんどん目が覚めてしまいました。

突然、一回目の停電。

雷の強い音と同時に部屋の電気が消えました。目の前が真っ暗になり、一瞬何が起こったのか理解できませんでした。母は、すぐに懐中電灯を私にわたしてくれました。部屋が少し明るくなり、家族の顔がみえた時、私は一安心しました。父が東北電力に電話をし、問い合わせてくれました。工事をしてくれている話を聞き、電気の復旧を待ちました。二十分後電気がつきました。家族みんなで喜びましたが、その後しばらくしてまた、大きな雷の音がしました。

二回目の停電。

ニュースでは大雨警報、洪水警報などが出ていて驚きました。電気がついたと思ったらまたすぐに消えて、次の日の夜までつくことはありませんでした。

村の防災無線から、土砂災害の危険があるため避難指示の放送が流れてきました。何度か防災無線が避難指示を伝えましたが、私達家族は全員避難せずに家の中にいました。

祖父が避難しようと一度外へ出ましたが、もうすでに道路は大雨で浸水していました。ひざの上まで水があふれていたのです。

「もう無理だ。家にいた方が安全だ。こんな夜中に移動するのは危険だ。」

と判断し私達は家の中で雨がおさまるのを待ちました。

辺りは真っ暗で、外がどのような状況なのか想像もつきませんでしたが、道路の浸水を見て、これはただ事ではない、何か大変なことが起きていると感じていました。眠る事も出来ず朝になりました。

翌朝、外に出ると、家の周りは土砂で埋め尽くされていました。あまりにも衝撃的で声が出ませんでした。田んぼの中にも土砂が入り稲がつぶれてしまいました。裏山の沢が決壊してしまったのです。

私達家族は土砂の片付けを行いました。土砂の土は水分を多く含んでいたので、ずっしりと重くスコップで何度も何度もすくいました。やってもやっても終わりの見えない大量の土砂。心の余裕もありませんでした。

数日が経ち、ボランティアの人達が私の家に来てくれました。仙台の人、庄内の人、最上郡外の人などたくさんの人が支援に来てくれました。仙台の人達は、震災の恩返しとして参加してくれた人もいました。親戚でもない他人が、自発的に活動し自主的に活動してくれる姿に胸を打たれました。「大変だったね」「困った事があったら言ってくださいね」「何か必要な物ありますか」などと、自分の事のように考え、ボランティアの方が一生懸命働いてくれました。家のまわりが元のようにきれいになった時は、涙があふれるほどうれしかったです。

私は今までボランティアについて、手助けをする事だと思っていました。しかし、それ以上に人を勇気づけられる仕事だと実感しました。私は、復旧に向けて一人ひとりの方が自ら行動し活動してくれる姿を目にし、自分の中で希望が生まれました。「何とかなるかもしれない」「元にもどるかもしれない」と、ボランティアの人達のあたたかさに触れ、前に進もうという気持ちが持てました。

今回私が土砂災害の体験をした事で、生きていく上での人と人のつながり、そしてボランティアの仕事のすばらしさを理解しました。私達家族に「ちから」を与えてくれ、勇気と希望を与えてくれました。感謝の気持ちを忘れずに、一日一日を大切に歩んでいきたいと思います。

私は、いつか周りの人が辛い思いをしたときに、その気持ちを一番に分かってあげられる人になりたいです。だから、今自分が出来る事に一生懸命努力し前に進んでいきたいです。